

英語教科書における文学作品の活用

— 現状と提案 —

川端 倫子
教科領域コース

1. はじめに

現在日本で使用されている検定教科書（英語）では、様々な題材が扱われている。教科書に掲載されている題材は、生徒だけでなく教員にとっても重要である。限られた授業時数・授業時間の中で、学習指導要領に基づいた内容を計画的に指導するには、教科書の内容を中心に進めることが合理的であるからだ。教科書以外のまったく新しい教材を取り入れることには時間的・運用的な制約が伴うので、教科書の内容を起点にして応用したものを援用せざるをえない。こうした現状を踏まえると、教科書の掲載内容は、授業内容や学習活動を大きく左右する重要な要素であると言える。

教科書で扱う題材に関して、高等学校学習指導要領（平成30年告示）外国語編英語編（p.18）では、生徒の学校生活や家庭生活など身近な内容を中心とした「日常的な話題」と、国内外の出来事や社会的課題を扱う「社会的な話題」を掲げている。この題材設定を鑑みて、日常的な話題や社会的な話題にも対応できる柔軟性がある文学作品は、英語学習において有用な教材になりうるのではないだろうか。

2. 先行研究

英語教育における文学作品の利用は、言語能力の育成に加えて学習者のモチベーションや思考力を育む点から、その有用性が指摘されてきた。近年では、第二言語習得研究や教育実践の観点から文学作品が学習者に与える影響について多角的に検討されている。例えば大野は、文学作品を扱うことで英語特有の豊かな表現に触れられる点を重視し、比喩的・修辭的表現の理解が深い言語理解につながると論じている。（大野 18-19）また安田は、英語学習者へのアンケート調査から、英語文学作品が学習への興味・関心や学ぶ意義を高める一方で、語彙や表現の難しさによる負担も伴うため学習者のレベルに配慮した教材選択や支援の必要性を指摘している。しかし言い換えれば、学習者の興味やレベルを考慮した作品選定を行えば、英語学習への興味を高め、学習者の主体的な学びを促すことができると言えるのではないだろうか。文学作品は登場人物の感情や葛藤、人間関係を描いているため学習者が内容に共感しやすく、学習への動機づけを高める教材として機能すると考えられるだろう。さらに田口は、文学教材がコミュニケーション能力の育成に役立つことを論じている。田口は、オー・ヘンリー（O. Henry, 1862-1910）の短編「20年後」（“After Twenty Years”）を題材に、文学教材が暗示的に語られた内容を含む点に着目し、そうした含意をめぐる言語活動がコミュニケーション能力の育成に資することを示している。（田口 4）このように、文学作品の教材としての有用性を示す研究は存在している。しかし教科書に掲載されなければ、学習者が文学作品を教材として利用する機会は減ってしまうだろう。西原が行なった旧学習指導要領下のコミュニ

ケーション英語I, II, IIIの教科書調査においては、文学的要素を含む教材は一定数見られるものの、短編小説や詩などの純粋な文学作品の掲載は限定的であり、設問も主に事実確認や事実理解を踏まえた基礎的な解釈活動にとどまっていることが明らかになった。(西原 35) したがって文学作品が英語学習において教育的意義を持つことが示されている一方で、教科書における掲載状況や授業での活用方法には改善の余地があることが分かる。したがって、本研究では、「高等学校用教科書目録(令和7年度使用)」(文部科学省, 2024)に記載されている教科書を分析し、教科書内における文学教材の占有率を明らかにした後、実践の提案を行う。

3. 分析と提案

3.1 分析

英語コミュニケーション I, II, III の教科書 71 冊を調査した結果、英語コミュニケーション I, II, III の教科書における文学教材占有率^{注1}は以下の表のようになった。

表：英語コミュニケーション I, II, III の教科書における文学教材利用率

科目名	正課数	正課外の課数	文学教材占有率		
			正課	正課外	全体
コミュニケーション英語 I	229 (7)	47 (31)	3.1%	70.0%	13.8%
コミュニケーション英語 II	235 (6)	57 (37)	2.6%	64.9%	14.7%
コミュニケーション英語 III	269 (7)	48 (30)	2.6%	62.5%	11.7%
合計	733 (20)	152 (98)	2.7%	64.5%	13.4%

*それぞれ少数点第2位を四捨五入

正課における文学教材の利用率は、英語コミュニケーション I, II, III のいずれにおいても約3%と、全体として低い数値であることが明らかになった。一方で、正課外における文学教材の使用率は高く、特に英語コミュニケーション I では、正課外教材の約7割が文学作品で占められているという結果が得られた。この結果から文学教材は正課教材としては扱いにくい側面を持つものの、その教育的な有用性自体は教科書編集者にも認識されており、完全に排除されることなく正課外教材として掲載されていると考えられる。つまり文学教材は授業の中心教材として採用するには制約が多い一方で、補助的・発展的な学習素材として一定の価値を認められているのではないだろうか。また使用可能な語彙の量や文構造の幅が広がることから、英語コミュニケーション III において文学教材の使用率が最も高くなると予想していたが、調査の結果、英語コミュニケーション III の文学教材使用率は、英語コミュニケーション I, II と比較して最も低い数値を示していた。この要因の一つは大学入試との関連性ではないかと考えられる。東進衛星予備校の公式サイトより、過去5年間の大学入学共通テスト本試験の出題内容を確認したところ、物語や小説など文学教材そのものを扱った問題は、2025年度共通テストで大問2つ出題されているが、2025年度以外は毎年大問1つ程度のみ出題されているだけで、説明文や実用的文章が中心となっている。この入試傾向を踏まえ、英語コミュニケーション III では文学教材の掲載を控える判断がなされている可能性がある。この

結果は、先行研究において指摘されていた「文学教材は語彙や表現が難しいため扱いにくい」という考えとは反対である。より高度な語彙や表現を扱うことが可能な英語コミュニケーション III において文学教材の使用率が低いという点は、語彙や文構困難性のみでは説明できない側面を示している。このことから、文学教材の掲載数の少なさは扱いづらさだけでなく大学入試とも深く関係していると考えられる。

3.2 実践の提案

外国語学習において文学作品を使用することの3つの利点として、言語習得能力の向上、学習者のモチベーションの向上、コミュニケーション能力の育成の観点をあげた。またチータムは、「理解できる作品を英語で読むことは、英語を身につける上で優れた方法だと言って構わない。(中略) 言語は経験を通じて身につくものであるからだ。しかも効果的に言語を学ぶには、まず第一にその経験が自分で十分理解できること、第二に楽しめること、第三に何度も、そして第四に言語のパターンがはっきりとわかることである。」(チータム 5) と述べている。この指摘を踏まえ、本論では、大前提である以下の①の他に、②から④の要素のいずれかが含まれていれば、文学教材を効果的に活用できるものとして、実践的提案をすることにした。

①生徒の英語力で、多少の補助があれば理解できる内容の作品である

②内容や設問に楽しさを感じられる要素がある

③言語パターンへの気づきを促す指導をおこなう

④リトールド活動や役割演技、視点を変えた表現活動などのコミュニケーション活動をグループまたはペア活動として取り入れている。

この4点をもとに、既存の教科書に採用されている文学作品を援用した実践案実践の提案を、以下に提示する。

まず *Comet English Communication I* (数研出版, 2022) では、“STORIES TO SOLVE: Folktales from Around the World” には民話集がある。ここでは英語のなぞなぞを8問提示している。これらの設問の中には、英語という言語の特性に着目させる内容も含まれており、例えば “Where does Saturday come before Thursday?” といった問いは、その代表例である。このような言語的特徴に基づくなぞなぞは、意味理解と言語形式への注意を同時に促す活動となっており、①②③の要素を備えた教材構成になっていると評価できる。さらに④の要素を追加することで、なぞなぞの答えや仕組みを学習者同士で説明し合う活動や、同様の形式のなぞなぞを自ら作成させる活動を加えることで、言語運用の機会を一層拡充することができる。

次に *All Aboard! English Communication I* (東京書籍, 2022) の Reading 1「Short Stories in English」の事例をとりあげよう。ここでは、三つの短い物語が掲載されているが、主として新出語句・フレーズの提示や読み方のポイントの説明にとどまっている。そこで、物語の情景や登場人物の心情が伝わるように工夫して読み合う朗読活動や、その後の物語の展開をグループで予測・創作して共有するコミュニケーション活動を加えることが有効である。このような活動を取り入れることにより、単なる英文読解にとどまらず、内容理解を基盤としたやり取りを通して、コミュニケーション能力の育成にも資する授業展開が可能になると考えられる。

4. まとめ

今回の調査で、現行の学習指導要領下で編集された英語コミュニケーションの検定教科書における文学作品の利用状況は、正課では約3%程度、正課外では70%近くであることが明らかになった。また文学作品の利点や引用から、文学作品を授業で扱う際に気を付けることを踏まえ、実践の提案を行った。文学作品を授業で扱うことに関して難しさや抵抗感があるかもしれないが、安田が、英語学習素材として文学作品を用いる場合、文学研究を目的とするものではないため、教員が必ずしも独自の解釈を示す必要はない(安田 12)と述べているように、作品を英語教育の教材として柔軟に位置づける視点の重要性を示している。本研究で示した実践案もこの立場に基づき、文学的解釈の追究そのものではなく、言語活動や思考活動を提案するひとつの素材として文学作品を活用することを目的としている。適切な作品選定と活動設計を行うことで、文学作品は学習者の内発的動機付けを高め、読解力や表現力の育成に資する有効な教材となるのではないだろうか。

注

1. ここでの「文学作品」とは、取り上げる教科書の目次や索引等において「物語」、「エッセイ(随筆)」、「詩」のように表記があり、明らかに文学作品として分類できるものや、そのように明記されていないが、上記の文学分類に当てはまると判断できる創作物、そして、伝記や新聞のような事実関係を説明した論説文や、一般的な日常会話例ではないものを対象とする。なお、課の題材が文学作品であっても、その作品の内容に触れていなかったり、名前のみの紹介であったりした場合は計上しないこととした。

5. 参考文献一覧

大野智彰「原書を読んで身に付く4つの力」、『英語教育』11月号、大修館書店、2024。

田口誠一「英語教育における文学教材の意義について — O. Henry の “After Twenty Years” をめぐって—」『尚絅大学研究紀要人文・社会科学編』第47号、2015。

チータム、ドミニク。小林章夫(訳)『『くまのプーさん』を英語で読み直す』日本放送出版協会、2003。

東進衛星予備校 共通テスト英語リーディング 全体概観

https://www.toshin.com/kyotsutest/about_reading.html

西原貴之「コミュニケーション英語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの教科書に掲載された文学教材の数とバリエーション及びその設問・言語活動」*LET Kansai Chapter Collected Papers*, Vol.18, 19-39. 外国語メディア学会、2020。

https://www.jstage.jst.go.jp/article/letkansai/18/0/18_19/_pdf/-char/ja

文部科学省(2020)「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 外国語編英語編」

https://www.mext.go.jp/content/1407073_09_1_2.pdf

文部科学省(2024)「高等学校教科書目録(令和7年度使用)」

https://www.mext.go.jp/content/20240415-mxt_kyokasyo02-000035269_3r.pdf

安田優、轟里香(2019)「英語学習における英語文学作品の有用性 — 学習者の視点から —」『北陸大学紀要第48号』, 77-89。